編者はしがき――無数の奇蹟を生み続けている「実相篇」――

生長の家創始者・谷口雅春先生の「真理」へ到る求道の旅はまさに次のことに尽きると言ってよい。

「もし、全知全能の神が実在するのであれば、なぜこの世に病気や貧乏、争闘等の悪しき現象があるのか」

神を否定する無神論者の疑問、論拠もまたここにある。しかし、長い求道の果てに、谷口雅春先生はこれに対して見事な解を与えられる。

「神が創った世界は『実相世界』であって『現象世界』ではない。『現象世界』の不完全さは、神が創ったのではないから神の責任ではない。この不完全な『現象世界』は人間の『心』がつくったのである」、と。

これを映画に例えてみれば、「神」とは光、「実相世界」とはフィルムということになる。「神」は「善一元」の完全円満な世界を創造せられ、それがフィルムに巻き収められている。映画はそのフィルムをレンズを通してスクリーンに映し出す。このレンズにあたるものが人間の「心」であり、スクリーンに当たるものが「現象世界」である。つまり、「心」というレンズがきれいであれば、そのまま「善一元」の完全円満な「実相世界」がスクリーンという「現象世界」に映し出される。しかし、もし「心」というレンズにほこりがついていれば、そのほこりが「影」となってスクリーンに映し出されるほかはない。このレンズのほこりをきれいにふき取れば、神様の創造し給うた「善一元」の完全円満なる世界が、この現象世界に完全に映し出される。「三界は唯心の所現」といわれる所以である。

谷口雅春先生は、この「真理」を啓示によって受けられ、導かれるままに文字にした

ものが『生命の實相』である。この〝神の言葉〟である『生命の實相』を読むことによって「真理」に目覚め、どれだけ多くの人が絶望の淵から甦ってきたことだろうか。

立教(昭和五年三月一日)当初、谷口雅春先生は「本を読むだけで病気がなおる」という衝撃的な「謳い文句」を掲げ、〝教え〟は燎原の火の如く広がっていった。今も当時も病に苦しむ人の数ははかり知れない。しかも、当時は一家に一人病者が出れば、それだけで家計が困窮を極めることも決して珍しくはなかった。それだけに、文字通り、藁をもすがるような思いで、この『生命の實相』を手にした人も少なくなかったことだろう。

その『生命の實相』中、最も多くの人に読まれ、そして数々の奇蹟を生んできたのが、本書の第二巻及び第三巻、第四巻に収められた「実相篇」にほかならない。

「この篇は最初の発行以来既に四十年になる。全集中最も多く難治症が全快したという治験の礼状を受けた部分である。実相は不変であるから今も書き直す必要を私はみとめなかった」と愛蔵版『生命の實相』第一巻のはしがき「愛蔵版第一巻に序す」(本全集第

一巻に収録。昭和四十五年執筆)に述べられている如くである。

「実相篇」は谷口雅春先生の「唯神実相論」のエッセンスが凝縮されている。その第一章「近代科学の空即是色的展開」は昭和初期の最先端物理学の知見を取り入れ、「真空中を光の波が伝わる媒質」としての「エーテル」に言及し、谷口雅春先生の「唯神実相論」のキーワードである「物質無」が説かれている。

この「エーテル」は、アインシュタインの「特殊相対性理論」の登場以降、物理学の世界では肯定や否定や不要論が入り乱れて今日に及んでいる。しかし、谷口雅春先生にとって、物理学に限らず心理学その他の諸科学の学説がいかに変遷しようが、説かれる「真理」の実在性はびくともしない。「真理」がすべてであって、その「真理」の説論に役立つ限りにおいて科学的知見を取り込むのであって、諸科学のその時々の学説から宗教的真理が導かれているわけではない。

第一章の「物質無」によって、一般常識として抜きがたく存在する「物質はある」との観念を払拭して、いよいよ私たちは「真理の奥殿」に導かれ、これまで想像もでき

なかった神の至福の世界に足を踏み入れるのである。

私たちは、こうして実相世界を知り、神の至福の世界に入ることによって「心」というレンズがきれいに磨かれる。そのとき、先に述べたスクリーンとしての「現象世界」は一変する。即ち、心が変われば運命・境遇は変わるのである。『生命の實相』を読んで数々の奇蹟が生まれてきた所以である。

しかし、一方で、人はその心をどうしたら変え得るのか、それがわからずに呻吟してもいる。そこで、重要になってくるのが「言葉」にほかならない。

『言葉は『信念』を喚び起し信念は直ちに人間の健康を左右するものでありますから、吾々は出来る限り言葉の善き使い方を知らねばならないのであります。『言葉』でこの世界に健康を満たせば、この世界の人類が健康になる。『言葉』でこの世界に光明を満たせばこの世界が光明化される。『生長の家』は実にこの『言葉の力』によって人類生活を健康化し、幸福化し、光明化せんがための『神の国運動』であって、『生長の家』の発行部数が殖えるほど、この世界に『善き言葉の力』が殖えることになる。『善き言葉の力』が殖えればそれだけ人間の心が光明化し、地上に浮動している人間の『想念の波動』が光明化し、一切の現実的悪の種子が浄められ、キリスト教でいえばキリスト再臨、仏教でいえば弥勒菩薩下生、即ち地上天国建設の時期が早まることになるのであります」(本書一六一～一六二頁)

ここにはっきりと、私たちの「幸福生活」の実現と生長の家出現の使命が記されている。「善き言葉」の力を駆使することによって、人類の「想念」を浄める。それによって人類生活の全面を光明化していく。生長の家のこの人類光明化運動は、そのまま「神の国運動」でもあるのだ。

一人でも多くの方に幸福になっていただき、この「神の国運動」に参画していただければこれに過ぐる喜びはない。

平成二十四年五月一日

谷口雅春著作編纂委員会